

年始状雑感 原 子朗

さいきんは年始状とはあまりいわず、もっぱら年賀状という。でも「お年始にまわる(行く)」とは今でもいう。音のひびきとしてはネンガよりもネンシのほうが澄んで美しい。意味では年始は年頭、年初、年甫(ねんば、甫はハジメ)と同じで、年始の賀(祝い)をつづめて年賀というのだろうから、そのほうが簡便なのだろう。簡便といえばハガキで出すのに状という。状とは封筒入りの封書のことをいってきたように思うが、まあそれはよいとして、ハガキは端書き、葉書きで、もとは、ちよつとした書きつけ、メモぐらいの意味だったのだろうから、正しくは「郵便端(葉)書」と一八七三年(明治六年)のハガキ誕生いらい、むかしのひとは正しく呼んできたよう

だが、もうこのごろは葉書とさえ書かずハガキと書く。端書とでも書こうものなら意味も通じまい。正しく郵便葉書といえば、パスのことを乗合自動車というような感じがしないでもない。パスだってオムニバス(乗合い馬車)の現代式略語なのだろう。そんなことはどうでもよいのだが、外国からくる年始状はみな封筒入りで、中国や韓国からのクリスマスカードと同じ厚手の年始状が封筒入りでくるのだが、日本ではすべてハガキである。外国のひとには一人に五百枚はおろか千枚以上もの年賀ハガキが木の葉のように舞いこむ実状は想像もつかぬらしい。日本人だって驚いていいことなのだが、さほどでもなく、日本国中、木の葉のあらしの中で酒など飲んでいる。

おそろしい、二十億枚もの葉書のあらし。それをさばく日本の郵便局の偉大さ。

あらしが吹いてくるから、こちらからも吹きかえさねばならない。そこで、いちいち書いておれぬから印刷となる。印刷の流行は「お年玉」などと甘ったれたことばをつけた年始状を郵便局が売り出した歴史に見あうようだ。私の記憶では、たぶん昭和二十五年の正月からではなかったか、このクジビキオマゲつきの赤ハガキのはじまりは、今のよりもっと小形のザラザラした紙質で二円か三円だった。

いっそのこと宛名まで印刷したくても、そうはいかぬから、相手の住所と氏名と様だけは、みんな手書き。文面を印刷した失礼のうめ合わせみたいに、どんなに下手でも不自由でも毛筆でと、その風習はなにがしつづいていふうだ。あの毛筆の字は、もらうほうも、ほんとにせつない。年に一度だけ、紋付羽織(ハカマまではかなくとも)を着ているような緊張とつらさが、にじみ出ている。もちなれたペンで書いてみると、むしろほっとするくらいだが、しかし大学生諸君の年始状にも筆がきが間々

あつて、単に儀礼的とはいえない心のこもりを、稚拙なだけに感じさせてくれる。

むかし、といつても印刷の文面のはやらなかつたころの年始状に、ずつとつておきたいようなのが多かつたように思う。げんに私など、そのころいただいたのを、ずいぶんとつてある。むろん、みんな手がきもの。毛筆とはかぎらないが、ペンがきものでも、むかしのはいい字やいい文面が多かつた。

それやこれやで私も年始状は文面もずつと毛筆の手がきで、下手でもがらばるつもりで書いたのだが、もういけません、数年前から印刷と相成つたのは、やはり量の問題ないし世間の風潮のせい、それに負けてしまつたのだと、なかば自己弁護し、なかば自分をふがいなくも思つたりしている。やはり量は質を駆逐（くちく）するのであつて、だいたいくジビキオマケのハガキがけしからん、とまたグチもいいたくなる。

こんどの年末年始はつまらぬ仕事にはまり、方々に失礼したので大きなことをいってはいけないのだが、やはり時間をかけて拝見しているのは手がきの年始状だつた。

びつちり印刷してある文面のより、二三行のでも手がきのほうに時間をかけて拝見しているのに気づいた。最も時間がかからな

書きぶりが、一字一字ペラペラで、とぼけたようにコロコロして、その線質はポールペンやサインペンが愛用されてるせい

いは「賀正」や「謹賀新年」の何年も使えるイモ判みたいなゴム印ので、住所氏名もゴム印のものようであつた。そこで考えさせられたことの一つを書く

生が自分の似顔をマンガにかき、口から風船玉を出して、そこに「ボクはもう18ナノダ」と片カナまじりで書く妙なダ止めの会話を、もしオトナにしたような文のつづりかたナノダ。

と、若い世代の男女、といつても大学生から三十前後までの二十代のひとたちの筆蹟

いまマンガの例を出したのは、ほかならぬマンガの影響が、その書体にも文体にも

と、文の書きぶりに、どこか大きく共通するものがあるということだつた。つまり書体と文体に、なにか時代的な共通点といつ

若き世代たちには無意識のうちに浸透して

る。この年齢層のひとたちは、まだそれほど量が悩まされな

いなという実態を

きものが圧倒的

で、それだけ書体や文体の特徴も正直なわけだ。

「寒さ一塩身に

しみる新年」とか「先生の

一層の研算を

祈る」とい

つた、よくある

学

生諸君のアテ

字や失言の類

は、もうここ

で

はいわな

いこととして

（前者は塩

漬けに

された感じ

一入、後者は研

鑽と正しく

書いて

も失礼なの

だが、失礼を

棚に上げて

、ざつ

とその特徴

をいうと、書

体といおう

か字の